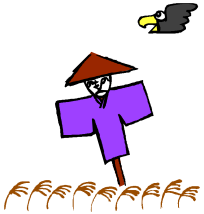
『譚綴』

『茂平と地蔵様』



九谷　六口

茂平（もへい）は、武蔵野の小高い丘の裾野に畑を持っていた。田んぼは、少し離れたところに流れる綺麗な川の側にあった。

茂平は、子供の頃から一人暮らし。既に親が亡くなってから十七年が経っている。周りに民家はなく、隣の百姓家まで歩きで片道一日ほどの距離がある。一人でせっせと野良仕事をするのが大好きな百姓だ。一人で暮らしていても寂しくはない。もう、慣れっこになっている。

茂平の家は小さくて、今にも壊れそうなボロ家だが気にしてはいない。茂平の毎日は、お日様が照っている間は、畑や田んぼで野良仕事をして、暗くなれば家に帰り粗末な食事をし、そのままの恰好で寝るだけのもの。人が訪ねてくることなど滅多にない。身寄りもない。

母親は茂平が生まれるとすぐに亡くなった。父親は、茂平が六歳の時に茅葺（かやぶき）屋根に巣くった足長蜂の巣を取ろうとして、蜂に刺され死んでしまった。親が残したものは小さな家と、広い畑と田んぼ。茂平は、よちよち歩きの頃から父親（すべ）について野良仕事を手伝った。一人でも作物を作る事はできるが、沢山作る術は習っていない。だが茂平一人が暮らしていけるだけの作物を作る事はできた。それに季節になれば、栗や柿、梨、柘榴（ざくろ）など美味しい果実も食べる事ができた。魚は、近くの川で釣りをすれば良い。一人で食べるのに手ごろな大きさの鯉や鮒。たまには鯰を捕り、肉を水に晒（さら）し焼いて食べる。香ばしくて旨い。

茂平は、いつも家からさほど遠くないところにある地蔵様に手を合わせ、一日の無事を感謝し明日の幸せを祈った。

「地蔵様、ありがとうよ。今日も良い日だった。野良仕事もはかどりましただ。明日もお天道様が出てくれるようにお願いしますだ。いつも、お願いだけで何もお供えできねーが、堪忍してくれな」

家に帰り、疲れた体を茣蓙（ござ）に横たえ、眠りに就こうとした、そんなある夜……。

コンコン、コンコン……

Copyright 2003 H.Mitani

誰かが戸を叩いているようだ。

「なんだー、こんな夜更けに……。まさか、狐か狸ではねーだろうな」

コンコン、コンコン……

「そう、強く戸を叩くでねー。誰だ？　誰が来ただー」

「旅をしている者じゃ。難儀している。戸を開けてはくれまいか」

「あれまー、人間の声だ。待て待て、今、開けるからな」

茂平が、心張棒（しんばりぼう）をはずし外を見ると老人が立っている。

「どうしただ。こんな夜更けに」

「相すまぬ事とは思うが、難儀しておる。この近くに孫娘が足を痛め、動けんでおる。済まぬが助けてはくれぬか」

「おうおう、それは可哀相に。よっしゃ、よっしゃ。おらが行ってやる。何処なんだ。さー、一緒に行くべー」

茂平は、老人の後を追う。

さきほど手を合わせた地蔵堂の側に、着物姿の若い娘がうずくまっていた。

「さ、もう安心していいだよ。おらが負ぶってやるからな」

娘を負ぶったが、驚いたことに意外と軽い。それに、よほど足が痛いと見えウンウン唸っている。

「あんたの孫娘は、どうしただ。痛そうに唸っているがなー」

「いやー、私が一緒にいながら……　恥ずかしい事だ。ちょっとこの先で石ころにつまずいたらしいのじゃ。ころびかたが悪かったらしく酷く痛めたらしい」

「そうか、そうか。今夜は、おらの家で休むが良い。蒲団なんぞはないが、乾いた藁（わら）がある。藁は暖かくて柔らかい。グッスリ眠れるぞ」

茂平は囲炉裏の種火を起こし、薪をくべた。湯を沸かし白湯（さゆ）を木の椀に入れ二人に渡す。

「おらの家には茶などない。白湯で我慢してくれな」

部屋の隅に藁を敷き、寝床を作る。老人は娘の足を手ぬぐいで拭いた後、水を含ませ、足に当てている。茂平が見ると、かなり酷い傷のようだ。転んだだけ

Copyright 2003 H.Mitani

で、あんな傷になるかなー、と茂平が訝(いぶか)しがるほどの傷だ。何かに挟まれたような感じで踝(くるぶし)が赤黒く腫れ上がっている。

「さー、寝床ができたぞ。暖かいしフワフワだ。さ、こっち来て寝た方が良いぞ」

娘は旅の疲れも手伝ったのか、痛みを忘れたかのように、すぐに眠ってしまった。

茂平と老人は、小半時(こはんとき)話をしたあと眠りに就いた。

老人から聞いた話は、こうであった。

老人の名前は、喜助(きすけ)。ある国で庄屋を遣っていたが歳を取り隠居。息子夫婦に庄屋の仕事を任せていた。民を考える庄屋で皆の評判も良かったと言う。しかし、二年ほど前に飢饉があり農民が米を寄越せと騒ぎ出し、挙句の果てに息子夫婦を殺してしまったと言う。あんなに感謝していたはずなのに喰うものがなくなると人間は、あーも酷い事をするのかと、老人は涙ながらに話した。娘は、この夫婦の子供であった。二人は仕方なく放浪の旅に出ていた最中だという。娘の名前は、菊。十六歳だという。

茂平は、飢饉や庄屋が殺された噂など聞いてはいなかった。

遠い国の話だろうと思った。

翌朝、茂平は、いつもと同じように野良仕事の準備をしていたが、娘の状態は一向に良くなってはいない様子だった。

「喜助どん。菊さんの足はどうだ」

「茂平さん、この状態では治るのに何日も掛かりそうだ。申し訳ないが、もう少し居させてもらいたいのだが……」

「おー、おー、おらは構わねーよ。いつも一人だ。たまには人の声も聞いていてーもんな。すっかり良くなるまで何日居ても構わねーよ。もっとも、旨いもんはねぇけどな。それで良けりゃ一向に構わねー。居てくれろ。おらも嬉しい」

料理と呼べるものはなかった。米と稗(ひえ)を混ぜて炊く。野菜はあるが生(なま)か塩もみ。味噌はなかった。川魚があるだけマシであった。塩焼き。川魚の塩焼き

Copyright 2003 H.Mitani

は旨い。二人は、貪(むさぼ)るように食べている。茂平は幸せであった。人に食べ物を作り食べさせた事など今までになかった。しかも、こんなにガツガツ食べてくれる。

菊は、焼き魚を食べ終わるとすぐに床についた。かなり悪いらしい。可哀想になー。茂平は暗い顔をした。

何日経っただろうか、菊の症状は徐々にではあるが軽くなっていくようだった。

喜助は物知りだった。何でも知っていた。

茂平が嬉しかったのは、畑や田んぼの耕し方、鍬(すき)の入れ方、米、麦、稗、粟などの作り方、野菜を大きく育てる方法などを教えてもらった事だ。大豆(だいず)味噌の仕込み方も教えてくれた。

「喜助どん。作り方は判ったが、おらは種籾(たねもみ)を持ってねーだ。手に入れるにしても金もねーし、交換する物もねー。恥ずかしーな」

「そうか。私が捜してこよう」

喜助は、フラッと出かけていったが、ほどなくして種籾が入った小さな俵を抱えて来た。

「あれまー、どこで手に入れただ。りっぱな種籾だなー」

二人は苗床を作り種籾を蒔いた。田植えが待ち遠しい。

喜助は、いろいろな国の話もしてくれた。幾つかの豪族が武士を集め領土を広げようと争っているらしい。

「遠くでは、そんな事が起こっているだか。殺し合いは駄目だ。おらみたいに毎日せっせと働き、お飯(まんま)が喰えれば、それで良いのになー」

「茂平は、今の暮らしが好きか」

「あー、おらは大好きだ。きちんと手を掛ければ、作物はきちんと育ってくれるし、川に行けばお天道様が、おらの分の魚を分けてくれる。それだけで良(い)いだ。綺麗なべべや、りっぱな家もいらねー。雨露がしのげればそれで良いだ。この着物もボロボロだけんど風邪はひかねー。ただ、菊さんに会った時は、ちょっと恥ずかしかったけどな。菊さんは、綺麗だ。でも、おらには関係ねーことだし、恥

Copyright 2003 H.Mitani

ずかしがる事はなかったんだがな」

「そうか、恥ずかしかったのか。茂平、菊は綺麗か」

「あー綺麗だ。たまーに、あっちの道を人が通るけどな。菊さんみてーな綺麗な人は見たことがねー。この前、ほれ、あそこの地蔵様のところだ。あそこで女の人が手ー合わせてただ。おらが後ろを通ったら振り向いただ。おらー、顔、合わせなければ良かったと思っただよ。こんなこと言ったら悪いけど、まるで、バケベソだー。ビックリしただよ」

「バケベソとは何だ」

「あれー、知らねぇだか。喜助どんにも判らねー事があるだか。バケベソってえのはな、お化けかベソかいたような顔ってことだ」

「面白いことを言うな。菊の足も大分良くなってきた。もう少しで歩けるようになる」

「歩けるようになったら、また何処かに行くだか」

「うーん、判らんな。菊も此処が気に入ったようだしな。茂平が迷惑でなければすっかり元気になるまで居た方が良いのだが……」

「何言ってるだ。迷惑なんて、これっぽっちもねー」

ある日、田んぼから帰ると、菊が、土間をゆっくりと歩いていた。

「菊さん、菊さん。まだ、駄目だ。歩いちゃ駄目だよ。折角、もう少しでちゃんと治るんだから。無理しちゃ駄目だー」

「茂平さん。お陰さまで、ゆっくりだったら歩けるようになりました。ありがとうございました」

茂平は、ドキッとした。ありがとうございましたとは、別れの言葉ではないか。茂平が見ると、菊は、右足を引きずるようにして歩いている。ひょっとすると足はこのままかも知れない。茂平は、居たたまれない気持ちになった。

「茂平さん。痛みはなくなりましたが、私の右足は、これ以上、元には戻らないようですね。見ていて可笑(おか)しいですか」

「そんな事ねー。そんな事はねぇよ。菊さんは綺麗だし、ゆっくり歩けば、余計

Copyright 2003 H.Mitani

おしとやかに見えるだ。そっちの方が良いだよ」

「ホホホ。茂平さんは、優しいのですね。それに私のことを綺麗だって。そんな事言われたの初めてです」

菊は、にこにこと笑った。菊が笑うのを見たのは初めてだった。綺麗な人だなー。茂平は、ウットリと見つめていた。

菊は、台所仕事や部屋の掃除が出来るようになっていた。

「喜助どん。あのボロ家が綺麗になっていくだ。嬉しいなー。やっぱ、手を掛けなくちゃ駄目だな。心を込めれば何でも良くなっていく」

茂平は、日に日に整っていく家を見てウキウキしていた。

「茂平が手を掛けるのは畑や田んぼだけだからな。家や着るものには無頓着だ。菊が、そっちをやってくれる。家や畑も田んぼも綺麗だ。茂平、良かったな」

野良仕事を終え、家に帰ると、いつものように菊が晩飯を作っていた。囲炉裏端を見て驚いた。

「菊さん。二人分だが、喜助どんは、どうしただ」

菊は、何も答えず包丁をトントンいわせている。茂平は、いつもと違う雰囲気を感じていた。変だな、喜助どんはどうしたのだろう。

菊は何も言わず晩飯の支度をしている。味噌汁が出来上がると二つの膳にのせた。二人は黙って晩飯を食べた。食べ終わり後片付けをした。

囲炉裏端に二人は座った。

「茂平さん、爺(じじ)は旅に出ました」

「なにー、菊さんを置いて一人で行っただか。どう言うことだー」

「旅立つ前に、爺は、こう言いました。茂平さんと夫婦(めおと)になれと」

「い、今、何と言った。菊さん何と言っただ」

「夫婦になれと……」

「菊さんとおらが夫婦かー。そんな馬鹿な。菊さんとおらが夫婦なんて、そりや

Copyright 2003 H.Mitani

―無理だ。そんただことありえねーよ」

「茂平さんは、優しいし、菊のことを綺麗だと言ってくれました。爺に言われたとき、菊は嬉しかったんです。良かったと……。茂平さんは私のことが嫌いなのですか」

「好きとか嫌いとかの問題ではねーだ。菊さんみてーな綺麗でしっかりした人を嫁に貰ったりしたらお天道様が怒るだ。怒って顔を見せなくなるだ。おらー、初めて会った時から菊さんが好きだっただ。でも、おらには関係ねーお人だと思っていただ。無理だー、そりゃ無理だ……。お天道様が……」

「では、明日の朝、お天道様がニコニコと顔を出してくれれば良いのですね……」

「そ、そ、そりゃーそうだ。お天道様が怒らなけりゃー、お、おらは良いだ」

この夜、茂平はまんじりともできなかった。菊さんが、おらの嫁に……。いや、何かの間違えだ。お天道様が怒るに決まっている。しかし、心の奥では、お天道様、顔を出してくださいと祈っていた。

翌朝、二人は暗いうちに起きだし東の空を見ていた。二人は無言だった。茂平は、落ち着きなくそわそわしている。菊は、じっとしていた。

茂平は、お天道様、出てください、出てください、と祈っていた。声に出てしまいそうで気を付けなければならなかった。

茂平は気が気ではなかった。どうしたんだ。今朝は、お天道様が出るのが遅い。お天道様ー。

東の空がほんのりと明るくってきたような気がした。茂平は目を見張った。

太陽は、ちょっと顔を出すと、光は一気に足元まで届く。

二人の足元に光が届いた。眩(まぶ)しいお天道様の光。茂平は口を開けたままだった。このように日の出を待ち望み、待ったことはない。凄い、お天道様は、こんなに輝いているんだ。二人は、なおも日の出を見ていた。菊の手が茂平の手に触れた。茂平は、その手をしっかりと握った。

二人は黙っていたが、手を取り合い歩き出した。言葉に出す必要はなかった。

Copyright 2003 H.Mitani

地蔵堂の前で二人は手を合わせた。これが二人の結婚式だった。

二人は幸せだった。二人は、良く働いた。足は引きずるものの菊は元気になっていた。実りも多い。茂平は二人分の食料を残し、有り余る作物を持って村に売りに行く。村といっても歩きで二日掛かりである。何度か村に行くうちに蓄えも出来た。茂平は、思い切って大八車（だいはちぐるま）を買った。作物を運ぶためだ。

茂平は、村で着物を見つけた。すぐに菊の姿が浮かんだ。茂平は、まだ一度も菊に贈り物をしたことがなかった。大した着物ではなかったが、茂平にとっては宝物にも思える着物だった。菊は喜んでくれるだろうか。帰り道、頭の中は菊の事で一杯だった。

着物を贈られた菊は、泣き伏してしまった。茂平は、どうしてよいか判らなかった。何で、泣くんだろう。

「菊、何で泣くんだ。怒ったのか……」

「お前様。こんな綺麗な着物を……。菊は、嬉しくて……」

菊は、一度袖を通しただけで、また元のようにたたみ大切にしまった。

茂平は野良仕事の支度をしていたが、菊の姿が見えない。表に出ると、菊が庭の隅っこでしゃがみこんでいる。近寄ると、もどしていた。背中を摩りながら言った。

「菊、どうしただ。何か悪いものでも食べたか」

「お前様、病気ではありません。赤子（ややこ）です。赤子ができました」

「赤子っ。子供かっ！　菊、赤ん坊ができたのか！」

「はい。お前様と私の赤子です」

茂平は、身動きもできずにたたずんでいた。

「おらに、子供が……」

お産が近づいたようだ。茂平は、湯を沸かし大き目の桶に入れた。茂平は何か他に手伝う事はあるかと聞いたが、菊は、母親から子供の産み方を聞いていたか

Copyright 2003 H.Mitani

ら一人で大丈夫だと言った。茂平の母親は茂平を産んで、すぐに死んだ。茂平は心配だったが外で待つことにした。

どれほどの時間が過ぎただろうか、オギャーオギャーと赤子の声が聞こえてきた。生まれた！　おらの子供だ。茂平は、部屋に向かって大声で叫んだ。

「菊さん。子供は五体満足か！」

意外にも中からは疲れた様子もない声が聞こえた。

「お前様。元気な男の子ですよ。さー、入ってください。二人の子供です」

茂平は菊が抱く赤ん坊を見た。真っ赤なクシャクシャな顔をしている。臍の緒もきちんと切ってある。

「あれまー、お猿さんみてぇだな。おうおう、ちゃんと男の印を付けてるなー。菊さん、体の方は大丈夫か」

茂平は、お産とは女にとり大変な仕事だと聞いていた。しかも初産である。驚いた事に、菊は、ケロッとした顔でこう言った。

「お前様、安産でしたよ。母親思いの赤ん坊です」

二人は、子供の名前を喜助と茂平から一字ずつをとり、喜平とした。菊は、お産の翌日から普段通りの生活を始めていた。淑やかな女だが、芯は余程強いのだろうと茂平は思った。

菊の乳は良く出た。喜平はスクスクと育っていった。

昼間、家にいる時は、菊が喜平を負ぶっていたが、二人で野良仕事をするときは、背負い籠に藁を敷きその中に入れた。晩飯を食べる時などは、胡座をかいた茂平の両足の上に乗せた。喜平は大人しい子供だった。二人の顔をじっと見つめ、ニコニコ笑った。二人は幸せであった。

這い々いからヨチヨチ歩きをし出した頃から、喜平は、そばを飛ぶ羽虫などを見つけるとサッと手を伸ばしたりした。捕まえる事は出来ないが、その動きは、茂平も驚くほどの素早さであった。この子は、俊敏な体を持った子供になるぞ。茂平は子供が大きくなるのが待ち遠しかった。

Copyright 2003 H.Mitani

喜平は三歳になった頃から、何にでも興味を示しだした。草木、虫、魚、囲炉裏、竈（かまど）、鋤、鍬……。そして、茂平と一緒に畑や田んぼに行った。見よう見真似で、手伝いもした。

「とと、これは何、あれは何。なんでそうするの……」

茂平は、一つ一つを丁寧に教えた。喜平は、一度聞くと決して忘れなかった。この子は頭が良い。菊に似たんだな。おらも菊も元気だ。おらは子供の時に一人になってしまったが、この子はずっと、おらたちと一緒だ。おらが知ってることは何でも教えてやるぞ。

茂平は、満足だった。

喜平が六歳になった頃から、菊は疲れたと言って寝込むようになってきた。顔色も良く、どこといって悪い所はないようだった。茂平は心配したが、菊は、寝込んでるにも関わらずニコニコしている。変だな、働き者の菊が寝込むとは。茂平は、不思議な気持ちであった。

寝込むようになってから、数日後、菊は寝床に座っていたが、茂平に話があると言う。

茂平は、菊の顔を見て驚いてしまった。綺麗である事には変わりがないが年寄りのような顔付きになっているのだ。

「お前様、長い間、ありがとうございました。菊は幸せでした」

「菊さん、何を言い出すだ。どうしたんだ、菊さん」

「お前様、以前、菊に贈ってくれた、あの着物を出してもらえますか。宝物と思っていましたので、今までしまっておきました。最後にあの着物を着たいんです」

「菊さん、おらには何が何だか、さっぱり判からねーよ」

「お前様、お願いします」

茂平は、何が起ころうとしているのか、全く理解できなかった。

菊は茂平に着物を着せてもらい、嬉しそうに着物を撫ぜながら語り出した。

「菊は、もう寿命です」

「寿命っ！　まだ、二十五でねーか。なにが寿命だ。縁起でもねーこと言っちゃ

Copyright 2003 H.Mitani

駄目だっ！」

「ホホホ、人間でしたら……　まだまだこれからですよね」

「人間でしたら、って……」

「お前様には信じられない事でしょうが、菊は、狐なんです」

「き、狐……」

茂平は、飛び上がらんばかりに驚いてしまった。

「お前様に初めて会ったとき、菊は、足を痛めていました。実は、罠を踏んでしまったのです。ウンウン唸っていると、何処からか、喜助さんが……。お前様、喜助さんは、私の祖父ではありませんの。喜助さんは、あの地蔵堂のお地蔵様なんですよ。お地蔵様は、罠を外してくれました。どこかで休んだ方が良いが、地蔵堂では狭すぎると言いまして……。そうだ、傷が治るまで茂平の所で厄介になれば良い、とお前様を呼びに行きました。傷が治ったら元に戻るつもりでした。でも、余りにも優しいので、お地蔵様にお願いしましたの。狐にしては長生きできました。お前様のお陰です。お前様、喜平は、りっぱな人間の子供ですよ」

気が付くと傍に喜平が座っていた。

「昨日、お地蔵様が枕元に来ましたの。お前様と喜平の事は、お地蔵様にお願いしています。菊は幸せでした」

ここまで言うと、菊は、静かに横になった。茂平は、体を揺すったが既に息はしていなかった。綺麗な顔である。喜平は、かか、かかと菊にすがったが、何かを悟ったのか、茂平の横に座った。

二人は、三日三晩そのままで居た。

四日目の朝、茂平と喜平は、鋤、鍬を持ち、家から数十歩離れた所に十尺ほどの小高い塚を造った。茂平は、あの着物を着せ菊をこの塚に葬った。

二人は、この塚、菊塚と地蔵様に手を合わせるのが日課となった。

喜平は、物覚えも速く、身のこなしも良く、キビキビと働いた。

Copyright 2003 H.Mitani

菊が亡くなって半年ほど経ったであろうか、ひょっこりと喜助が訪ねてきた。何年か前と全く同じ格好である。

「茂平、話があるのだが……」

「喜助どん。いや、地蔵様。今、思うと菊との暮らしは夢のようでしただ。でも菊が居ねーと、やはり寂しいものですだ。ところで話って何だ」

「喜平を連れて旅に出たいのだが、良いかな」

「えーっ！　喜平を連れて行くのかっ！　駄目だ、駄目だ。菊が居なくなって寂しいと言ったばかりでねーか。地蔵様、また、おらを一人にさせるのか」

「茂平、この子は頭の良い子だ。この子に、いろいろな国を見せてあげたいのだ。それに、教えることが沢山ある」

「地蔵様は、おらが駄目だと言っても喜平を連れて行くつもりだな。地蔵堂にいる時は、ニコニコ笑った優しい顔をしているが、ここに居る地蔵様は、優しくねーだ」

「茂平、喜助の為になる事だとは思わんか。いずれ、喜助は、戻ってくる」

「本当か。嘘をつく地蔵様なんて聞いたことがねー。本当だな」

「嘘ではない」

翌朝、喜助は、喜平を伴い旅に出た。

「菊さん、また一人になってしまっただ。菊さんは、地蔵様に喜平のことを頼んだといったが、これで良かったんだな。一人で寂しいが、おらは、野良仕事が好きだ。せっせと働けば気が紛れる。菊さんも見ていてくれな」

菊塚と地蔵様に手を合わせ、野良仕事に精をだす毎日が続いた。

一人暮らしに戻ってから、既に十数年が過ぎていた。

茂平は、いつものように畑で鋤を使っていると、遠くの方から馬の蹄（ひづめ）の音が聞こえてきた。かなりの数のようだ。あれま、戦（いくさ）でも始まるのかね。そんな事を考えながら音のする方を眺めていた。蹄の音は、だんだん近づいてくるようだった。よく見ると二十人ほどの騎馬武者である。鷹狩のような様相。茂平は、

Copyright 2003 H.Mitani

ポカンとした顔をして見ていたが、武者たちは茂平の前でピタッと止まった。
先頭を駆けていた若武者がひらりと馬から降り、茂平の前に来た。
「父上、お久しゅうございました」
茂平は、まだポカンとしたままだった。
「父上、喜平でございます」
「喜平っ！　おらの子供の喜平かっ！」
「はい。父上、お変わりないご様子。喜平、安心いたしました。今夜は、この者たちと共に、泊めてもらうつもりでおります」
見ると、武者たちも馬から降り、手綱を持って立っている。茂平が、顔を向けると皆、頭を下げ挨拶をしている。
「喜平、おめーも知ってるでねぇか、あの家に、こんな大勢を泊める事はできねーぞ」
「父上ご心配なく。雨露がしのげれば、それで良いのです。では、家に帰りましょう」
帰り際、喜平は、菊塚に立ち寄り長い時間、手を合わせていた。

十数年振りの親子の会話であった。供の者たちは、銘々勝手に座り込んでいる。
喜平の話によると、喜助に連れられ諸国を廻ったらしい。その間、いろいろな事を身に付けたと言う。商いの方法、家の造り方、武術、剣術、戦の遣り方、国の治め方……
今は、ある大きな国の領土の一つを任され、治めているらしい。この国は、茂平の家から馬で三日ほどのところにあると言う。大きな国の領主に仕えていた時に、戦で手柄を上げたり領主を補佐したりしたのが認められ任じられたらしい。
驚いたことに、喜平には、すでに男の子と女の子がいると言う。茂平にとっては孫である。供の者たちが居るためか、二人は、菊については多くを語らなかった。
翌朝、茂平が目を覚ますと、家の中には喜平や供の者たちの姿が見えなかっ

Copyright 2003 H.Mitani

た。茂平は、まさか夢だったのでは、と思ってしまったほどだ。しかし、外が騒がしい。外に出てビックリしてしまった。

庭に、三つの焚き火が出来ている。焚き火の周りには、竹串に刺した鯉や鮒、鯰、鰻が煙をあげている。供の者は車座になり焼けるのを待っているようだ。喜平が、近づいてきた。

「父上、朝飯でございます。昨夜は、皆、何も口にしていません。早くに起き、これらのものを獲ってきました。旨そうに煙を上げています。もう少しで焼きあがります。一緒に食べましょう」

旨い。やはり、大勢で喰うのは楽しいし味を一層美味しくさせてくれる。

喜平は、父上も館（やかた）に来るようにと言ってくれた。茂平は、どうしようか考えたが、孫たちにも会いたいと思ったので一緒に行くことにした。茂平の馬も用意してあった。茂平は、喜平らしいな、と思った。

広い豪華な館であった。館の者たちは、茂平を見ると皆、頭を下げた。茂平は喜平の部屋の二つ隣の部屋を使うことになった。

嫁と孫にも会った。利発そうな子供たちだ。まだ、四歳と二歳だと言う。孫たちは、爺（じじ）、爺と言って抱きついてくる。茂平は喜平が小さかった頃を思い出し、涙を流さんばかりに嬉しかった。菊のことも昨日の事のように思い出されたが口にはしなかった。

茂平は朝昼晩と、今まで口にしたことがない豪華な食事にも驚いていた。畳も硬いままである。お付きの者たちは、茂平を大お館（やかた）様と呼び、下にも置かない接し方であった。喜平は、まだ若いにも関わらず、家臣たちからも慕われているようであった。

館に来て数日が経ったある夜、茂平と喜平は、一緒に夕餉をとっていた。

「喜平、おらは、そろそろ帰らねばならねー」

「父上、ここがお気に召しませんか」

Copyright 2003 H.Mitani

「ここは天国みてーなところだ。ここが気に入った気にいらねぇとか、そう言うことではねーのだ。作物の事が気になってな。手入れしねーと駄目になるだ」

「そうですか。父上は、田畑を大切にしてますからね」

「それによ、ここの人たちは皆、良い人だ。おらの事をえらく大切にしてくれる。でもな皆には言うなよ。おらは、そうされると尻がムズムズしてきてな。こそばゆくなるだよ」

「ハハハー、父上らしいお言葉ですなー。判りました。孫たちも寂しがりますが、父上の思い通りにいたしましょう」

いくら茂平が断わっても、喜平は駕籠で帰れと言う。しかも、茂平が乗る駕籠以外に三つも駕籠がある。米、味噌、醤油、干物、着物、蝋燭……　土産だと言う。喜平は、このような形でしか親孝行が出来ないと言う。茂平は断わりきれなかった。館を出る時、館の者、全員が見送ってくれた。孫たちは、爺、爺と言って駕籠を追いかけた。茂平は孫との別れが一番辛かった。

家に帰ると、真っ先に菊塚に行き、孫たちの事を菊に知らせた。

「やはり、おらにはこの家だな」

夜中、茂平は、蝋燭を燈した。この家で蝋燭を燈すのは初めてである。明るく暖かい光は、菊を思い出させてくれる。菊と一緒に居るようだった。

お天道様が顔を出すと、畑や田んぼに出かけ、顔を隠すと家に帰る暮らしが続いた。茂平のいつも通りの変わらない暮らしだ。

三年ほど経ったであろうか、野良仕事をしていると、遠くに馬の蹄の音が聞こえた。早馬らしい。だんだん近づいてくる。一人の若武者が鞭（むち）を使いものすごい速さで駆けて来る。茂平の所に来ると、さっと馬から降りた。汗と埃（ほこり）　で凄い形相である。茂平の傍に来ると片膝をつき、お知らせでござる、と大声で話し出した。

「大お館様、お、お館様が亡くなられましたっ！」

Copyright 2003 H.Mitani

「何－っ、お館様が亡くなったっ！　喜平が死んだと言うのかっ！」
「は、はい。お館様は亡くなりました」
若武者は、こう言うと下を向き、声を上げて泣き出した。
「ど、どう言うことだ。詳しく話してくれろ。おいっ。悲しいのは判るだが、話を……」
若武者は、肩を震わせながら話し出した。

四、五日前の事だ。喜平は、普段通りに重臣たちと評議をしていたが、急に倒れたらしい。周りの者たちは慌てふためいたが、本人は別に驚いた様子もなく床に就いたと言う。どうも、倒れることは判っていたらしい。床に就くと、文箱から書状を出すように重臣に言った。書状には、言い遺し事、としたためてあったと言う。

内容はこうであった。
一、自分が倒れたら、息子たちが大人になるまで、筆頭家老が　政（まつりごと）　を受け持つ事
一、二人の息子は、母親と共に茂平に任せる事
一、喜助という老人が来たら、子供たちのことは総て喜助に任せるよう、茂平に伝える事
一、喜助が息子を旅に連れて行った時は、母親は館に戻り息子の帰りを待つ事
一、自分を菊塚に葬る事

茂平は話を聞いて思った。菊の血だ。聡明な頭、俊敏な体。しかし、寿命は短いのだ。菊は二十五で、喜平は二十八。喜平は、それを悟っていたのだ。
茂平は、急に孫たちが心配になった。
孫たちを、おらに任せる。喜助が旅に連れて行くといったら総て喜助に任せろ。自分が辿った道と同じ道を子供たちにも与えようとしている。茂平は、喜平が自分の人生に満足していた事を知った。

Copyright 2003 H.Mitani

数日後、長い弔い行列が続いた。喜平は菊塚に葬られた。盛大な心のこもった葬式だった。

茂平は葬むる前に喜平の顔を見た。全く陰りのない澄んだ顔であった。菊の時も同じだった。眠っているような、楽しい夢を見ているような顔であった。

葬式の後、孫たちと母親が残った。茂平に、また家族ができた。

長男は、茂千代（しげちよ）、長女は、菊恵（きくえ）と言った。母親の多恵は、もの静かな女だった。毎日、菊塚に行き手を合わせている。寂しげな後ろ姿に茂平は心を痛めていた。この時代の武者たちは、戦がない時には野良仕事をする。茂平は多恵を野良仕事に誘った。多恵は、嬉しそうに鍬（くわ）を撫ぜている。

「お父様、多恵は鍬を使うのが上手いのですよ。子供の頃、親を手伝いました」

言葉どおりだった。細い体をしているが、しっかりとした腰つきで鍬を振るう。畑の草取り、田んぼの畦（あぜ）の修理。多恵は何でもこなした。茂平はホッとした。身内が死んだ時は、野良仕事が一番だ。体を動かし汗をかけば、悲しみを忘れる。

孫たちは好みが違っていた。茂千代は豪快に遊んだ。川で泳いだり、魚を素手で捕まえたりした。蛇などにも全く怖がる様子を見せなかった。茂平が嬉しかったのは、決して虫や、蛇、蛙などを殺さないことだ。豪快だが心根は優しい。茂千代は、日に日に逞（たくま）しい体つきになっていった。茂千代、お前は長生きしてくれろ。茂平は、その事だけが気掛かりだった。

菊恵は、草花が好きだった。見慣れない草花を見つけると根っこから掘りおこし、水で洗って観察している。たまにだが、花や茎、葉っぱ、根っこを噛んだりしている。茂平は毒でも口に入っては、と心配したが、ほんのちょっと噛むだけなので、とやかく言うのは止めた。

茂千代は、茂平、多恵と野良仕事を楽しそうにやった。もう十歳になっている。晩飯は多恵と菊恵が作った。茂千代は、囲炉裏端で喜平の小さい頃の話を聞きたがった。茂平は何でも話した。たまに、婆ちゃまは、どんな人だったかと聞

Copyright 2003 H.Mitani

く。茂平は遠くを見やるような顔になり、菊について話した。でも、本当の姿については決して口にしなかった。今は、自分と地蔵様だけの秘密である。

賑(にぎ)やかで心温まる毎日が続いた。多恵がこの家に来た時は、色白な弱々しい感じであったが、今は違う。日に焼けた顔は艶々(つやつや)と輝いている。茂平は、やっぱ、野良仕事だな。人間を元気にさせてくれる、と一人、悦に入っていた。

五年が過ぎた。四人で晩飯をとっていると、コンコンと誰かが戸を叩いている。茂平には、誰が来たかがすぐに判った。

あれまー、地蔵様だ。また、孫たちを連れに来たな。

三人は喜助に会うのは初めてだった。喜助は、相変わらず以前と全く同じ格好である。茂平は可笑しかった。地蔵様は、いつも同じ着物だ。それに歳を取らねー。前と同じ老人だ。

二人の孫は、すぐに喜助に懐(なつ)いた。多恵は、旧知のような態度で接している。言い遺し事を読んだだけではなく、喜平から聞いていたのだろう。

茂平は、喜助が言い出すのを待っていた。喜助と目が合った。喜助は、ニコッと笑った。茂平も笑った。

翌朝、三人は、喜助と共に家を出た。喜助は、旅の途中に多恵を館に送るという。

また、茂平一人の暮らしが始まった。蝋燭を燈しながら菊に語った。また、一人だー。おらは一人暮らしには慣れっこだ。孫たちは、どんな大人になって戻ってくるかなー。菊、楽しみだな。

早いもので、あれから十数年が経っていた。茂平は、七十歳。小川で顔を洗う時、たまに自分の顔を見てみる。ははー、おらも年寄りになった。地蔵様のような顔付きになったな。だども、まだまだ大丈夫だ。野良仕事も問題ねー。飯も旨い。そんな独り言をいう毎日だった。

Copyright 2003 H.Mitani

そんなある日、茂平はちょっと疲れを感じて昼寝をしていた。外が騒がしい。眠い目を開け、外を見た。あれまー、何人居るだ。

五人だな。誰だろうな。体を起こしてみた。

五人は、土間から部屋に上がってきた。ぼんやりした目に逞しい体の男が映った。

「爺、茂千代です。菊恵も母上も一緒です。それにこの子は、私の子供です」

「へー、茂千代に菊恵かー。おうおう、多恵さんも一緒か。元気そうだな。多恵さん、野良仕事は遣ってるか。このこまい子たちが茂千代の子供か。おらの曾孫（ひまご）だな。可愛い顔をしているな」

皆、一緒に菊塚に行き、手を合わせた。曾孫たちも大人たちを真似て小さな手を合わせている。

楽しい晩飯だった。

茂千代は、喜平の国を治めていると言う。政（まつりごと）は、楽しいらしい。

菊恵は、医者になったと言う。そうか、草花をよく噛んでいたが、薬草を見分けるのに役立ったんだな。

良かった良かった、皆、元気だ。

翌日、茂平は皆と語り合っていたが、急に眠くなってしまった。

「おら、ちょっと眠くなっただ。横にさせてもらうが、皆は、居てくれろ」

どれだけ眠っていたのだろうか。茂平が、目を覚まし、ふと見ると、枕元に喜助が座っている。

「地蔵様、おらー、随分寝てしまったようだな。皆は、帰ったようだ。さてと、野良仕事をせねばな。地蔵様、お陰で皆、りっぱに育ってくれた。地蔵様にもお礼を言わねばな。いつも通り、お供え物はねーがな。済まねーな」

二人は表に出た。地蔵様は、また来るからな、と言葉を残し消えた。

また、茂平一人の暮らしが始まった。良い天気が続き実りは多かった。しか

Copyright 2003 H.Mitani

し、茂平は自分の分だけ作物を作ることにしていた。おらー年寄りになっただ。そんなに沢山は食べねー。おらの分だけで良いだ。

訪れる者はなかった。極たまに喜助が顔を見せるだけだった。

孫や曾孫たちは、どうしたんだろうな。たまには顔を見てーもんだが。

ある日、野良仕事をしていると、太鼓の音が聞こえてきた。それに、何か歌っているようだ。

「宮さん、宮さん、御馬（おんま）の前で……」

よく見ると、何かの旗を掲げ、妙な着物を着た行列が歩いている。

「何だ、アリャ。肩に棒のような物を担いでいる。それに、筒袖に股引だー。変な連中だな。触らぬ神に祟りなしだ。こっちに来るなよ」

それからしばらくして、今度は、肩から襷（たすき）を掛けた男を先頭にした行列が通っていく。頭には笠とは違い、テッペンが平らなものを乗せている。やはり行列は、旗を掲げている。中には涙を流している者も居る。

「これまた妙な連中だな。近ごろ、変な行列が続くな」

驚く事が起こった。バタバタと音を立てて何かが、もの凄い速さで走り去ったのだ。それに、籠（かご）のような物が、これまたもの凄い速さで目の前を通り過ぎていった。空からも音が聞こえてきた。バリバリと耳が潰れるのではないかと思うほどの音だ。見上げると竹とんぼのようなものが、飛んでいる。

「今度のは凄かったな。アリャ何なのかな。そうだ、今度、地蔵様が来たら聞いてみよう。孫や曾孫のことも気になるしな」

「地蔵様、ぶったまげただよ」

茂平は、この前の事を話した。

「それによー、最近、孫や曾孫から何の連絡もねーだ。地蔵様なら元気でいる

Copyright 2003 H.Mitani

か、知ってんだろう。教えてくれろ」

地蔵様は、ニコニコしながら、こんな事を言った。

「隙間（すきま）が出来たようだな。修理するかな……。いや、総てを話そう」

地蔵様の話を聞いた茂平は、目が飛び出んばかりに驚いてしまった。

「なんだと、おらはとっくに死んだんだと。孫や曾孫が来た時か。あん時、急に眠くなったが、あん時か。おら、自分の歳は忘れたが、結構長く生きてると思ってな。おらも変だと思っただ。しかども何故、おらはこうしてるだ。全く変わりねー暮らしをしているだ。何故だ」

「菊だ。菊が、頼んだんだよ。茂平さんは優しい良い人だ。野良仕事を大切にしている。自然にも優しい。ずーっと何時までも、今の暮らしができるようにしてくれ、とな。菊は、一所懸命頼んだよ。狐とはいえ、一度、助けたものの頼みだ。それに狐の思いは強い。聞かない訳にはいかないものな。どうだ、茂平、今の暮らしは」

「いやー、どうせいつも一人だったし、いつも通りだな。悪くはねーよ」

「ワハッハー、悪くはないか。私と一緒に、ずーっとこうしているか」

「地蔵様と一緒なら、楽しいな。ずーっと、一緒か」

「そうだ。ずーっとこのまま一緒だ。茂平は、地蔵堂に小さな石像があるのを知ってるか」

「うんにゃ、知らねーよ」

「そうか、では、一緒に地蔵堂に行ってみよう」

二人は、地蔵堂に向かった。

「あれまー、ニコニコ笑ってる石像だ。これは、だれの石像だ」

「茂平、お前のだ。お前が死んだ後、孫や曾孫が造ったんだよ。茂平、ずーっと、このまま一緒だ。そうだ、茂平に今の世の中を見せてあげよう」

急に、辺りが暗くなったと思うと、パッと明るくなった。

何と言う音だ。ブーブー、バタバタ、ベリベリ……。それに息ができないほどの汚れた空気。茂平は咳き込んでしまった。

Copyright 2003 H.Mitani

「こんな空気を吸ったら、おらー死んでしまう」

「茂平、お前は死んでいるんだ。もう死なない。私は、茂平が生まれる、ずーっと前から、ここに立っている。いろんな人が通り過ぎていった。それに、いろんな事が起こったよ。それらを、ただジーっと見ていた。これからも見続ける。それにいろんな人が、お願いに来る。全部を聞いてあげる訳にはいかないがな。世の中がどう変わっていくか、これからは、茂平と一緒に見続けることになる。面白いぞ、茂平」

「地蔵様、面白そうだな。いや、面白れーに決まっている。楽しくなってきたぞ。菊に感謝しなければならねーな」

今も、練馬、旧富士街道、谷原交差点の近くに、地蔵様とニコニコ笑った小さな茂平の石像が立っている。

我々には、聞こえないが、多分、二人は、楽しそうに世の中の変化を見ながら語り合っているに違いない。

（了）

Copyright 2003 H.Mitani

譚綴

「茂平と地蔵様」

二〇〇二年五月十二日

編集・発行者　エムツー・プラデオ
三谷弘

禁無断転載・複写

M²plaDeO
Planning & Design Office
Copyright©Mitani2005

Copyright 2003 H.Mitani